曺寧柱と京都における東亜連盟運動

――東亜連盟運動と朝鮮・朝鮮人（二・完）――

松田利彦

論文要旨

本稿は、曺寧柱が中心となり、東亜連盟運動の一環として、一九四〇年以降約二年間にわたり在京都朝鮮人留学生を巻きこんで展開した運動を素材として、同運動と朝鮮人の関わりを明らかにするとともに、戦時期の在日朝鮮人運動の性格を考察しようとした。元社会主義運動家で、日中戦争期、東亜連盟運動に活路を見いだそうとした曺は、留学生の組織化に力を入れ相当数の運動参加者を得た。曺ら運動の中心部にいた少数の者は、朝鮮統治批判の視点をもった東亜連盟論にひかれつつ、結果的には民族意識が磨滅していくという過程を経たが、多数派の留学生参加者は朝鮮独立論に対する東亜連盟論の立場に必ずしも一体化しきれなかった。このような本運動の広がりと参加者の中の意識の懸隔は、東亜連盟運動の朝鮮人への浸透の度合いとその限界を映しだしている。と同時に、この運動は、戦時期の在日朝鮮人運動の体制内化とその中での民族意識の残存という状況を具体的に示すものでもあった。

はじめに

本稿は、先に発表した「東亜連盟論における朝鮮問題認識――東亜連盟運動と朝鮮・朝鮮人（一）」（本誌第一号、一九九六年三月。以下、拙稿aとする）をふまえ、東亜連盟運動に参加した朝鮮人の経歴・活動・思想などを考察しようとするものである。

東亜連盟運動は、満洲事変を主導した石原莞爾を中心として、日中戦争期以降、本格化した社会運動である。満洲国の統治理念たる「民族協和」や「王道」原理を日中関係に適用し、日中間の停戦、東亜諸民族による連盟結成を実現することにより、「世界最終戦」に備えようとする

ことが運動理論上の目的とされた。一九三九年に結成された東亜連盟協会（後、東亜連盟同志会と改称）を担い手とし、日本国内のみで会員一万名を超えたこの運動は、在日朝鮮人や中国・朝鮮など植民地・半植民地下の民族からも参加者を見た。

翼賛体制下日本における唯一の生き残りともいうべきこの特異な社会運動については、既に多くの研究があるが、近年では、理論的指導者たる石原莞爾の思想の内在的分析を超え、考察対象は現地末端での活動における指導者層あるいは参加者一般の言動へと広げられつつある。[1] 朝鮮・朝鮮人との関わりという視角からの東亜連盟運動の検討は、研究史のなかでは未開拓分野だが、このような研究動向に教えられるところは大きい。拙稿aで明らかにしたように、東亜連盟論は独自の朝鮮論を活発に展開したが、それが朝鮮人の運動参加者にいかに受けとめられ、彼らの運動をどのように規定したか、といった側面の考察は、東亜連盟運動と朝鮮人の関わりを総体として理解するために欠かせないだろう。

本稿では、曺寧柱という東亜連盟運動に共鳴した一朝鮮人の行跡、そして曺が一九三九年から四二年にかけ、在京都朝鮮人留学生を組織して行った運動を取りあげたい。曺寧柱は、東亜連盟運動に深く傾倒し、「東亜連盟運動をもっとも熱烈に支持宣伝した朝鮮人のいわゆる三羽烏」[2]の一人と評されている。また、日本国内で在日朝鮮人が担った東亜連盟運動のうち、組織人員・運動の継続期間などの点でもっとも影響力の強かったのは、この京都での運動だった。本稿の問題意識からすると格好の考察対象といえよう。

さらに今日の在日朝鮮人史研究においては、戦時期の運動がしばしば先鋭的な、しかし非組織的・散発的なものであったことも関わって、この時期の在日朝鮮人運動のもった複雑な性格やそこに示唆される意識の多様性を具体的に描き切れていないように思われる。在京都朝鮮人による本運動は、流動的な身分の留学生によって担われたこと、および、東亜連盟運動という日中戦争期に入ってから活発化した運動を支柱としていたこと、により、それまでのこの地域の在日朝鮮人運動と人脈的・思想的な結びつきをほとんど持っていない。しかし、本稿で明らかにするように、この運動が、一九二〇年代以来活動を続けてきた留学生団体を基盤とし、また、相当数の留学生を実際に組織したことも事実である。本稿のアプローチは、個別的事例の研究という限界をもつ一面で、京都在住朝鮮人の運動史の一端を明らかにし、戦時期の在日朝鮮人運動の性格の究明にいくらかの寄与をなしうるだろう。

Ⅰ　曺寧柱の経歴

曺寧柱は、一九一三年二月、慶尚北道禮泉の富裕な地主の家に生まれた。五歳の時から学んだ伝統的な書堂教育で「反日的な師匠の訓導」を

受けたり、公立普通学校に通うようになってからキリスト教教会が窮民の救済に手を差しのべるのを見たりして、「いつしか横暴な日本と不遇な朝鮮との関係が感情的に意識されはじめた」（「曺回顧」C、一九五頁、同A（一）、六頁）。一九一九年の三・一独立運動を前後して朝鮮人の間に高まっていた抗日意識・民族感情は、曺の胸中にも自然に根を下ろそうとしていたのである。三・一運動の四年後、関東大震災に際しては、被災者のために一〇銭を寄付に行き、朝鮮人の無差別虐殺についての消息をそれとなく知ったともいう（「曺回顧」C、一九五頁）。

こうした原初的な民族意識に具体的な形を与えたのはマルクス主義だった。一九二五年頃、曺は京城高等普通学校に入学したが、先覚的な学生達の間には、社会主義がヘゲモニーを確立していく一九二〇年代朝鮮の思想状況が色濃く投影されていた。

「学校では放課後、隅で『プロレタリア、イデオロギー、オルグ』とか云ってきゝ初めの用語を連発しながら行われる上級生間の口論は、英語に親しみかけたときであるだけに少くとも私には魅力の一つであった。その中の一人は独立の正義観に燃えて盡きざる理論体系を内包している様子である。……早速私は本屋から星と鎌のついた本を購入して下宿で乱読した。……歳月を経ると共に校内に頭角をあらわして読書会などのメンバーをリードしたりした」（「曺回顧」A（一）、七頁）。

後に官憲資料において、曺が「京城中学校（ママ）第二学年在学当時ヨリ熾烈ナル民族意識ヲ抱懐シ朝鮮ノ独立ヲ我国［日本］ニ対スル共産主義革命ヲ通シテ実現セムコトヲ意図」[3]した、と指摘されているところともほぼ一致する回想である。かくして、「最初は独立思想からだんだんマルクス・ボーイになった」のだった（「曺回顧」B、二八二頁）。社会主義は、植民地期朝鮮において一般に民族解放理論として受容される傾向があったが、曺の事例もこの時期の知識人青年の一つの典型を示していたといえるだろう。

京城高普在学中の一九二九年一一月には、光州抗日学生運動が起こっている。当初全羅南道に限定されていたこの運動は一二月に入ると舞台を京城に移し、第一、第二両高等普通学校でも上級生を中心に檄文が撒かれ、同盟休校が波及した。後年の官憲資料によれば、この時、曺は「自ら率先して京城府内所在中学校等を歴訪し夫々一斉同盟休校の敢行を煽動」したともいう[4]。

曺は、この後、京城高普を中途退学している。光州学生運動への関与によるものと思われるが、はっきりしない。ともあれ、これによって、早熟な社会主義者曺寧柱は活動の場を朝鮮から日本に移すことになった。

曺は、一九三二年四月日本に渡り、京都帝国大学法学部に入学した。当時一九歳である。京都を選んだのは「左翼学者の伝統があり勉学にも都合よいし、間近かには労働都市の大阪が控えているので組合運動の実践にも参加が可能だった」ことが理由だった（「曺回顧」A（一）、九

頁)。そして、日本共産党が事実上外郭団体と位置づけていた日本赤色救援会(以下、赤救)に加入した。赤救には、当時、「鮮人組織ノ飛躍的進展」が見られ、例えば赤救大阪地方委員会には六八三名の朝鮮人が参加し、この地域の労働運動の指導者金文準・趙夢九らも支援をしていた。[5] 当時、柔道で鍛え、筋骨隆々のたくましい青年だった曺は、「有事の際はテロ班の采配をあてがわれ、革命、[ママ]記念日、カールローザデーなどにはビラの撒布、平常は同志獲得に専心した」(「曺回顧」A(一)、九頁)という。

もっとも、その活動は長くはつづかなかった。曺のように街頭運動の実践部隊として日本の共産主義運動に挺身した在日朝鮮人共産主義者は、しばしば弾圧を受ける最前線に立つことになった。曺もいわゆる「記念日街頭デモ」のたびに必ず留置場に入れられた(「曺回顧」B、二八三頁)。しかし、曺に挫折感をあたえたのは、個々の検挙体験よりも満洲事変後、日本社会全体で進みつつあった思想抑圧の強化だった。

渡日から一年後の一九三三年春、曺の在籍する京大法学部では、文部省により滝川幸辰教授の休職が強行された滝川事件が起きた。京大内外で起きたこの時の学生運動に曺が大きく関与した形跡はないが、結局、京大を辞職した佐々木惣一・末川博らを追って中途退学し、立命館大学予科を経て同大学法経学部に移った。[6] もとより曺にとって京大は左翼運動に携わる足場にすぎなかったとはいえ、当時日本人学生で退官教官に殉ずべく退学届を出した者は少数でしかも慰留されてしまったのに比べると、思い切った行動ではあった。京大退学で曺は父親の勘気を被り仕送りを減額されたため、苦学を余儀なくされたという。

さらに、これとほぼ時を同じくして、獄中にいた佐野学・鍋山貞親ら日本共産党幹部の転向声明、次いで雪崩の如き党員の大量転向が起こった。曺の属していた赤救は、「植民地の同志から佐野・鍋山の裏切を粉砕しよう!」と呼びかけていたが、[7] 第一線の行動隊として共産主義運動に献身してきた曺にとっては、党幹部自らの転向声明は青天の霹靂であり、孤立感を抱かせるに十分なものだった。

「河上、佐野、鍋山の諸氏の検挙を契機として転向声明がひき続き公表され、一方同志らはみな処世に齷齪して要領のよい世渡りに浮身をやつし、踵を連ねて転向した。私一人が取り残されたような気がした」(「曺回顧」A(一)、一〇頁)。

特にマルクス主義経済学の権威河上肇については、曺はその著書を愛読し、河上の大阪講演を護衛した体験もあったため、[8] 政治活動からの引退という河上の声明は衝撃を与えた。

このような状況下、曺が「取り残されたような」気持ちを抱いていたことは、他方で、自分だけは共産主義者として孤塁を守ろうとする意志を持っていたことも示している。立命館大学在学中も休暇で帰省するたびに「友人の朴相熙や黄泰成としょっちゅうつき合っては思想問題で話

し合った」という。[9] ここに名の見える二人の友人は、後に筋金入りの共産主義者として生涯を全うしたことが知られている。[10]

しかし、主たる活動舞台とした日本では、周囲で転向者が相次ぎ、赤救も三四年末までには指導者の検挙で活動停止に陥っていた。

「こゝに、私はソ連と思い合せてマルクス思想を再検討し、共産主義を人生の最大依処にした私の世界観も暗黒に低迷した……闘争心のはけ口を武道稽古に求め、憂さを夜飲の酔でまぎらした。全くのデカタン（ママ）である。世界観を喪失した希望なき境遇ほど暗澹（ママ）たるものはない。かくて、私の思想的空白の時代が続いた」（「曺回顧」A（一）、一〇頁）。

このように一九三〇年代半ばの数年間、曺は、共産主義者として踏みとどまろうとしながらも、組織の壊滅や周囲の者の相次ぐ転向に敗北感を深めていた。官憲資料において、曺が「立命館大学予科在学当時我国［日本］ニ革命ノ実現不可能ナルコトヲ自覚シタルモ依然朝鮮独立ノ意図ヲ清算シ得ス」[11]としているのは概ね正確だろう。

なお、在京朝鮮人共産主義者の動向について、ある官憲資料の観察によれば、一九三三年時点では朝鮮人には「一人の転向者なき」状態だったが、日中戦争前後から、完全な思想転換は疑わしいものの「民族的解放を企図するが如きは現下の情勢に於ては到底不可能なる」との自覚が進んだ、とされている。[12] 一九三〇年代半ば、大量転向の時流に抗して思想を堅持しようとして、かえって孤立感と閉塞感を味あわざるをえなかったのは、曺寧柱も含め、この時期の在日朝鮮人共産主義者の中に見られた一つの流れだったと思われる。

さて、閉塞状況を痛感していた曺は、突破口を満洲に求めようとした。満洲であれば共産主義運動が可能と思ったとも、「大学卒業とはいえ朝鮮人には五十円のまとまった就職などどだい無理だから、満州でも行こう」と考えたともいう。[13] 立命館大学卒業（一九三九年春）を前にした一九三八年頃の感懐と思われる。

満洲行きのつてとして曺が念頭においていたのは福島清三郎という人物だった。そして、福島への接近は、結果として曺を東亜連盟運動に引き合わせることになる。

福島は、一九三六年、京都市左京区田中大久保町に、建物だけで百坪の広さの義方会という武道場を開いた武道家である。[14] 福島は当時立命館大学柔道師範をつとめており、同大学空手部の助手だった曺と知り合ったらしい。福島は一九三八年頃、東亜連盟論者の牛島辰熊（福島の後輩の柔道家）や今田新太郎（陸軍中佐、牛島の友人）を通じて東亜連盟運動を知るにいたった。そして、「国民思想の堕落」を憂え、「満洲国に真面目に武道を始めたならば、必らず日本人自体も自覚して将来を誤らず満人としても従いて来るであらう」[15]と考え、満洲建国大学の武道顧問と

して毎年渡満していたのである。

大学時代から義方会に出入りし、師範にも登用された曹は、福島を「あくまでも実力が主体で、民族差別など毛頭ない……公平無私な人格」と評価し、「師父の情」を抱くに至った（「曹回顧」C、一九九頁）。福島も、曹に「お前は見所があるから満州に行かないで内地で働け」と述べたという（「曹回顧」E、二頁）。福島としては、曹を、武道を通じての「民族協和」という自己の信念によく応える愛弟子と見たのだろう。一九三八年、朝鮮人・満洲国留学生・日本人等、二十数名の学ぶ「協和塾」を義方会に隣接して設け、曹を塾頭とした。また、曹を石原に紹介し、東亜連盟運動への直接の導き手となった。[16]

石原莞爾の「日記」一九三九年一月二七日の条には、「福島氏紹介ノ緒方、益、曹三氏来訪」と記されている。[17]当時京都の舞鶴要塞司令官だった石原とのこの最初の会見を、曹は印象深く記憶に刻んでいる。同行した友人二人とともに旅館の一室で石原と相対したが、その様子は次のようなものだったという（「曹回顧」B、二八四頁）。

「将軍［石原］は風呂から上がってシナ服を着て出てきましたが……三人が正座していると、『まあ、ゆっくり、ゆっくり』と言って、あらかじめ三人の名前を書いて出しておいた紙を見て『この中で曹君は誰だ』と聞く。『私です』と言うと、『どうですか、誰が朝鮮人かわからないではないか。何で日本人と朝鮮人が喧嘩しなきゃいかんのか……喧嘩はやめなければいかんし、それをやるのは日本ではないか』と言う」。

石原と面会した他の朝鮮人の回想でも、これとほぼ同じ言葉をかけられたという話が出てくる。[18]東亜諸民族の「協和」による連盟の結成という思想を朝鮮人に伝えるため、石原が好んで用いた言い方だったのかもしれない。

石原との会談での具体的な論点は曹自身の回顧以外、手がかりがない。満洲事変当時の満洲支配構想の変化や「世界最終戦」に備えるための東亜連盟運動の腹案などが主な話だったようであり（「曹回顧」B、二八四頁、同C、二〇一頁、同E、三頁）、曹の伝える内容は今日石原の思想として確認されているものと大きな食い違いはない。

朝鮮に関しては、「曹回顧」C（二〇三頁）では、「朝鮮は日本にとって生命線なのだ」としつつ、「朝鮮人ほど政治好きな民族はない。政治の自由を認めたい。人心の収斂（ママ）でもある」と述べたとしているが、曹との初対面のとき既に、石原が、対朝鮮（人）政策についてここまで明確な持論をもっていたかどうかやや疑問である。残されている資料から見る限り、石原は、曹をはじめとする朝鮮人との接触を経てから、その後

に朝鮮論を具体化させていったように思われるからである。[19] むしろ、「曺回顧」B（二八四頁）が石原の発言として伝えるように、「[満洲事変後] 中国人に自治能力はあるし、朝鮮人にもあるということがわかって、満州では彼らに自治を許すべきだと考えるに至った」といった付随的な形で、朝鮮人の政治的権利に言及した程度だったかもしれない。

会見全体の印象を、曺は次のように振り返っている（「曺回顧」C、二〇三頁）。

「帰途に、友人らは先覚とか怪物とかの表現をした。私には『政治の自由』が印象的であった。ただ天皇とか国体とかの確信じみたことばが耳障りであった。心ひそかに疑念も湧いた。……その奇抜な論調が快い響きではあるが、戦時中なのだ、ひょっとすると私共ねじけた民族性を手なずけるための懐柔なのでは、と疑いたくもなった」。

曺の感じた魅力と疑念とは、どちらもすぐには消せなかった。曺は、一方で、石原・東亜連盟論への接近の度合いを深めた。この年三月頃から先述の義方会協和塾で日本人学生と満洲国留学生を中心に週二回の研究会をもち、「東亜連盟思想の宣伝啓蒙に努め」た。[20] また、八月、石原の第一六師団長（京都）への転補に際しては、曺は義方会道場生を引き連れて引っ越しを手伝い、その頃から石原の講演会にも必ず出向いたという（「曺回顧」C、二〇六頁）。確かに、石原日記に記された朝鮮人面会者の中でも曺の名は群を抜いて多い。[21] にもかかわらず、曺は完全に運動に没入することには躊躇していた。義方会の会員は全員東亜連盟運動に加わっていたのに、曺のみが加入しなかったことに福島清三郎は不満を抱いていた。[22]（「曺回顧」B、二八五頁、同E、四頁）。「いろいろ抵抗があって、苦しみながら徐々に脱皮」したと、曺は表現している（「曺回顧」B、二八五頁）。

以上、曺寧柱が社会主義運動に関与し、挫折した後、東亜連盟運動に関心を持ちはじめるまでの行跡をたどった。東亜連盟運動への関与の背景には、福島清三郎や石原莞爾といった人物の知遇を得るという偶然の要素もさることながら、実は曺自身の主体的な意志が強く働いていたことも見落とせまい。民族解放運動の一環として参与した社会主義運動に展望を失い、「思想的空白」を感じた曺は、自己の内部の空洞を埋めるべく東亜連盟論に積極的な関心を示したのだった。と同時に、そうであればこそ、東亜連盟論が自己を支える新たな理念たりうるかに疑念を持ち、東亜連盟運動の中に民族意識と相いれない要素をも直感していたのだろう。

そして、社会主義運動の中で思索よりも常に現場の活動に精力を注いできた曺は、今また、自己の葛藤を十分に整理しきらないまま、この運動に身を投じはじめたように思われる。一九三九年末から四〇年初めにかけ、在京都朝鮮人留学生を対象とした組織運動が本格化するが、この

過程で、曺は、東亜連盟論に対しどの程度の距離をおき、それはどのように変化したのか。また、曺のもとに参集した運動参加者たちの意識はどのようなものだったのか。次章では、このような問題を考えたい。

Ⅱ　在京都朝鮮人留学生と東亜連盟運動

1　運動指導者の経歴・意識

本節では、曺とともに運動を指導した中心人物数名の経歴・意識を検討する。

大学都市京都には韓国併合前後から朝鮮人が留学しており、一九一五年には京都朝鮮留学生親睦会が結成されている（一二三年京都朝鮮留学生学友会と改称）。一九二〇年代以降、朝鮮人学生の多い大学には、京都帝大留学生同窓会（二四年）、同志社朝鮮人留学生会（二六年）、立命館朝鮮人留学生学友会（三四年）などの留学生組織がつくられた。集会や雑誌の発行を通じて民族意識を高める運動が展開され、民族主義運動・社会主義運動に関与する留学生も現れた。留学生数も一九二〇年代から三〇年代にかけて、一二一名（中等学校以上、二五年）から一六六九名（三九年）へと大幅に増加した。

しかし、日中戦争期、日本における朝鮮人留学生運動は次第に厳しい状況におかれていった。一九三〇年代半ば以降、共産主義運動が壊滅し、民族主義団体や相互扶助組織も解散に追いやられていく情勢下、留学生運動は在日朝鮮人運動の最前線に押しだされていた。その分、留学生運動には治安当局の監視と圧力が集中し、一九四一年九月には、「本月末迄に於ける在住朝鮮人の治維法違反検挙者一一八名中……検挙人員の七六％は学生を以て占むる状況」となっていた[23]。京都の場合、府当局が、一九三六年秋、留学生団体に対して、今後学友会の集会で朝鮮語の使用を禁止する旨諭示しており、同志社大学・立命館大学などの学友会からいったん拒絶を受けながらも、三八年末には京都朝鮮留学生学友会にこの条件をのませている。翌年には、府下五校の留学生団体に対し、「『留学生』なる観念を脱却せしむる為め」、団体名から「留学生」の字句を削除させた[24]。

曺寧柱が在京都朝鮮人留学生の組織化をはじめたのは、まさにこのような時だった。一九三九年初めに石原を訪ねた曺が、最初に朝鮮人留学生に働きかけたのは、同年の末である。一一月と一二月の二度にわたり、趙恩済（立命館大学法学部生）、梁麟鉉（同志社大学法学部生）と、義方会協和塾で会談し、東亜連盟理論の普及について約している[25]。また、同じ頃、趙および金貞黙（立命館大学経済学部生、立命館朝鮮学友会

会長）に対し、「理論の研究と同志の獲得を為すべし」と述べ、この年八月に刊行されていた運動のテキスト『東亜連盟建設綱領』（杉浦晴男著、立命館出版部）と一〇月に創刊された東亜連盟協会機関誌『東亜連盟』を手交した。[26]

注目されるのは、曺寧柱・趙恩済・梁麟鉉・金貞黙ら東亜連盟論に関心を寄せていったこれらの人物達が、翌一九四〇年には相次いで在京都朝鮮人留学生運動の指導的立場に立ったことである。五月、在京都朝鮮人留学生の全体組織である京都朝鮮人学友会の臨時総会が開かれ、一九九名の参席のもと、曺が会長に選任された。官憲資料は、この時の曺を「革新団体東亜連盟委員にして右翼を標榜せるも民族意識濃厚なる人物なり」と評している。[27] また、正確な時期は特定できないが、遅くとも同年末までには、趙恩済は金貞黙のあとを継いで立命館朝鮮学友会長に、梁麟鉉は同志社朝鮮学友会長に就任している（梁は翌年、曺に次いで京都朝鮮人学友会会長となっている）。[28] そして彼らは、さらに留学生の中へ東亜連盟運動の拡大をはかり、二年間にわたり運動の指導にあたることになる。この経緯は次節に譲り、ここでは曺と最初に接触した三名の略歴を見ておきたい。

趙恩済は一九一三年慶尚南道の農家に生まれた。一九三三年渡日し、三九年立命館大学に進学したが、苦学に耐えられず一年余り後には学業を断念し、蓄音器音針卸売業を営むことになった。渡日後、「朝鮮人ノ悲惨ナル生活状態朝鮮人ノ内地渡航制限等ノ事実ヲ見聞シタル結果内地人ハ殊更朝鮮人ニ対シ差別待遇ヲ為スモノナリト曲解シテ民族意識ヲ抱懐スルニ至」った、と官憲資料は記している。[29] 梁麟鉉は、一九一五年生まれ、咸鏡北道出身。一九三四年日本に渡り同志社大学に進学した。一九三七年から三九年にかけ、友人の下宿などで同志社専門学校の朝鮮人学生五名と「朝鮮人ニ対スル差別圧迫ヲ憤慨シ内鮮一体ヲ標榜セル……朝鮮統治ノ方針ヲ非難痛撃」していたという。[30] 金貞黙については経歴は明らかでなく、曺との接触以後、東亜連盟運動に深く関与したかどうかも判らない。[31] ただ、金の場合も、立命館朝鮮学友会会長として、先述の京都府当局の朝鮮語使用禁止方針に対して拒絶を続けていた経緯がある。

これらの人物は、当時二十代半ばから後半の、いずれも曺と同世代に属する青年だった。また、彼らには曺のような社会主義運動の経験はなかったというが、民族差別に痛憤を感じていた趙恩済・梁麟鉉にしても、留学生運動を指導していた金貞黙にしても、共通の背景として、何らかの形で民族的自覚をもっていたことが理解されるだろう。

しかし、他方で、東亜連盟論に基づき彼らが指導した運動に、民族独立運動の性格を読みとることは意外に難しい。曺のもとに趙・梁らが参集してきたのと同じ一九四〇年後半頃から、東亜連盟論の中には、従来ほとんど言及のなかった朝鮮問題について、民族文化の「維持」や朝鮮

「自治」論など独自の提言が見られるようになった。しかし、朝鮮問題を「国内における民族問題」[32]（傍点―筆者）と位置づけていることにも窺われるように、それは、あくまでも朝鮮植民地支配体制の枠内で、政治的圧力による同化政策の押しつけを批判するにとどまり、同化主義そのものを否定したり朝鮮の分離・独立を容認したりはしなかった。曹らの運動を一義的に民族解放運動と規定しがたいのはこのような点にある。

それでは、運動指導者の思考の中で、民族意識とこのような東亜連盟論の論理とはどのように折り合い、同居していたのか。曹寧柱の場合を中心に、この点を検討してみたい。

曹は、一九四〇年二月、「日鮮雑考」という文章を、東亜連盟運動の準機関誌というべき『王道文化』誌上に発表している。[33] 趙・梁を運動に引き入れた当初の頃である。ここには、当時の曹の問題意識がよくあらわれている。

この文章では、まず、冒頭で「日鮮間問題は深刻化してこそあれ、決して落着はしておら」ず、かえって「多事多難に当面せる現状」が指摘される。例えば朝鮮本国での日本軍兵士に対する送迎や供出には「官庁の強制が潜在」していることや、朝鮮人志願兵の絶望的心理が描かれている。在日朝鮮人については、労働者の「酒癖と喧嘩好き」に対しては、彼らを「斯くあらしめた根拠を見窮めずに、現実のみを指摘して断定する如きは独断に流れ易い」と警告するとともに、彼らに対する住居問題などでの差別の撤廃を訴えている。さらに、朝鮮服や朝鮮歌謡などへの当局の圧迫にも、それら民族的風俗を「喜ぶのが反日運動だとすると一体我々は如何したらいいんだ」と憤る（以上、二二～二四頁）。

また、これと関わって、「満洲に王道楽土を創造する」という日本の言い分は満洲の民情悪化を防ぐために持ちだされた「一時的方便」にすぎない、とする満洲国留学生の言葉に同意を示してもいる（二三頁）。先述のように、曹は一時期、一般の日本人同様、満洲に「新天地」を求めようという考えをもっていたが、満洲支配の欺瞞性を察知していなかったわけではなかったのである。それはまた、満洲国の建国理念たる「王道」に根拠を求める東亜連盟運動に、曹がなお完全には一体化していなかったことも示していよう。

さらに、当局の同化政策には、次のような批判を向けている（二四頁）。

「己の主観を恣まゝに加味した俄か作りの規定を朝鮮人に呈示しこれを履行せねば不忠の臣として懲罰すると言ひ張って、朝鮮人に悪寒戦慄を感ぜしむるの如き浮薄壇横は、益々日本国体を誤って伝へ、愈々離反の基となるばかりである。……同化主義結構だ。朝鮮民族に幸福を齎すのは同化を俟つのみといふ好意を朝鮮人が真に正解せりとせば低頭合掌に遑ないだろうが『朝夕にして遂ぐ可し』との強ひ方には、

伝統に執着する朝鮮人にとって『無理を強ひるのが日本か』としか考へない」。

かかる主張は、「民族の融合」を「人類窮極の理想」としつつも、「民族が存在する間はその民族感情を十分尊重せねばならぬ。……言語風俗等を政治の威力によって急速に変革せんとするが如きは、厳に慎まねばならぬ」[34]と論ずる東亜連盟論の主張とよく一致する。この時の曺においては、日々見聞する朝鮮人同胞への差別・偏見を解消しようとする意識がまず先に立ち、東亜連盟運動の説く朝鮮論は、差別の存在すら認識していない日本・日本人への批判の立脚点となっていたのだった。

しかしながら、朝鮮人への待遇改善を日本人の「国体の正しき認識」（二四頁）に期待し、「内鮮協和の不可避性」（二五頁）を展望しようとするこのような思想には、朝鮮独立論という選択肢が入る余地もなかった。文章末尾では次のように論じられる（二五頁）。

「独立運動を随所に蜂起させ徒らに離反して行くの如きは、朝鮮治者をして併合主旨徹底の勇気を益々軟弱消耗させたといふ所に、朝鮮人自体にも責任ありしを我々は見逃がしてはならない。独立要素無きにも拘らず欧米真似で独立々々の句を矢鱈に使ひ度がる自刎自滅の暗愚は自重すべきである」。

このように、民族差別の解決を最重視し、従来の主義・主張の転換はそのために正当化されうるとする議論は、朝鮮において東亜連盟運動の組織を指導した姜永錫や、ひいては共産主義から転向した朝鮮人一般にも認められるものだった[35]。客観的には、曺も独立運動家としての自己認識を捨て、このような転向者の一群に加わっていたといわざるをえない。

この「日鮮雑考」という文章以外にも、曺の回想には、石原との問答を通じて、東亜連盟論における朝鮮「自治」論が朝鮮独立論と相いれないものであり、むしろ韓国併合が「東亜連盟」結成にいたる一階梯として積極的に位置づけられさえしていることを知ったというくだりがある（「曺回顧」C、二二五～二二六頁）。朝鮮問題に対する東亜連盟論のスタンスは、曺にもほぼ正確に伝わっており、それを曺の側も受容しつつあったのである。ちなみに、官憲資料では、曺らが独立意識を東亜連盟運動に仮託し「国家主義運動を利用せる朝鮮独立運動」を行った、という基調の記述が見られるが、これには相当のバイアスがかかっていることに注意しておく必要がある。

ともあれ、ここにおいて、曺の思考には、東亜連盟論を朝鮮人差別批判のよりどころとする方向と、朝鮮独立論の否定ないし攻撃に向かう方向――東亜連盟論における朝鮮論そのものに内包された二つの方向性が生じていたといってよいだろう。「日鮮雑考」の中で曺は、当局者に称賛されるような朝鮮人に対しては、その「機嫌どりには悲哀を超へて閉口せざるを得ない」と軽蔑をあらわにしつつ、一方でしばしば同胞の口

にする「この親日奴が」という罵倒を感情論としてたしなめてもいる（二四～二五頁）。「親日奴」への歯切れの悪さに窺えるように、二つの方向のどちらに傾くか、微妙な地点に立っていたのである。

前者の方向性を重視した曹寧柱像は、同志の回想にも官憲資料にも描かれている。梁麟鉉は、「曹氏は、共産主義や民族自決主義は希望がないが、東亜連盟運動は日本自体が運動するのに便乗しつつ行えるものだから必ず成功しうるといい、力を尽くし独立精神を昂揚させた」と回顧している。[36] この証言は今日の時点のものであり、「独立精神を昂揚」云々を額面通り受け取ることには慎重でなければならないが、内務省警保局編『社会運動の状況』中にも、「東亜連盟運動は日本人による運動の一環にして……朝鮮人の独立運動として弾圧さるることなきこと」を曹らが運動方針の一つとして確認した、との記述がある。[37] 周囲の者から見て、曹の言動に、民族運動のいわば「隠れみの」として東亜連盟論に便宜的に便乗するという発想が見いだせなかったわけではないようである。

しかしながら実態は逆に近い。特に一九四一年以降、東亜連盟論への傾倒が深まるのに比例して、朝鮮独立論否認の傾向は鮮明化した。石原のもとに足繁く通う中で東亜連盟論あるいは石原個人に魅せられたことを、曹は次のように語る（「曹回顧」C、一二八頁）。

「石原は……第十六師団を追われ、予備役にまわされた［一九四一年三月］。それまでの私は、石原私淑の域を出なかったが、いまは心から信ずる石原にかわった。かく、信念石原となった根拠は三つある。一は石原の高邁な『人格』であり、二は正論なるが故の『迫害』であり、三は誰にもまけない彼の『愛国』であった」。

過剰なまでの思い入れの窺われる文だが、この自己分析は、五百旗頭真氏の研究の一節を想起させる。氏は、東亜連盟運動にマルクス主義の洗礼を受けた多数の知識人・活動家がひかれていったことを、次のように説明している。[38]

「こうした議論［アジア諸民族の軽視への反省を東亜連盟結成の基礎条件とする石原の議論］は、第一に、日本帝国主義批判という思想的レベルの問題、第二に、今後の日中関係改善と国際情勢への対応策という政策的レベルの問題、第三には、論者石原の熱意と暖かさという人格的な問題の三者の結晶としてなされるため、聞く者にとって帝国主義批判や理想主義が不徹底であっても、政策的な妥当性が説得力を持ち、それが、時として狂っても石原の人格的迫力が支えるというように相互補完的に機能していた」（傍点―筆者）。

さらに私見を加えれば、これらの諸要素を強化する役割を果たしたのが、東亜連盟運動への抑圧である。一九四一年一月、日本政府が東亜連盟協会をはじめとする国内興亜諸団体の統合に乗りだすことを閣議で決定すると、これと符節をあわせ一部知識人や民間右翼からも、東亜連盟

運動を、反戦思想、マルクス主義の影響を受けた危険思想などと攻撃する論が起こった。当時、運動事務所の看板に赤いチョークで「赤だ」と書かれたことを曺も目撃している（「曺回顧」E、四頁）。また、政府・民間の攻撃の中からは、東亜連盟運動が朝鮮独立を幇助しているのではないか、という声もあがっていた。それらは、曺自身いみじくも表現しているように、「正論なるが故の『迫害』」という信念を抱かせ、運動参加への主体的意志をかえって強化する効果を持ったのである。

ところが、別稿で明らかにしたように、東亜連盟論の説く朝鮮論は、このような圧迫や攻撃の中で変質をとげようとしていた。多方面からの批判に応えんがため、東亜連盟運動は朝鮮独立論をむしろ抑止する機能を果たしている、という点を強調しはじめたのである。また、これと相まって、朝鮮支配政策への批判にも現状追認の色合いが強まった。[39]

一九四一年初頭以降の時期は、このように、曺が東亜連盟論への傾倒を深めるとともに、東亜連盟論における朝鮮論が変質を来すという二つの現象が同時に進み、相乗的に、曺の主張に急角度の変化がもたらされる転換点となったのである。一九四二年初めに曺が『東亜連盟』誌に寄せた「京都に於ける内鮮協和運動の手記」という一文を見てみよう。[40] 曺の同志獲得の経験・今後の腹案を主に述べたものだが、これを二年前の「日鮮雑考」と比較すると、いくつかの重要な違いを発見することができる。一つは、朝鮮独立論・独立運動に対する見方である。書き出しは、以下のような吐露から始まる（五五頁）。

「東亜連盟は朝鮮独立を煽動するものであるといふ世間の妄言を聞いて、私は常に苦笑を禁じ得ない。民族といへば、直ちに独立運動の発火点であるかの如く思ふ世間の人には、民族の誇りを卒直（ママ）に認めんとする東亜連盟に不満らしい。……私達の過去の誤りから斯くも民族即独立の観が常識化されたかと思へば、私達は深い反省を払ふと同時に……東亜連盟運動に献身し過去の罪に酬ゐんものと決意してゐる」。

ここでは、朝鮮独立論が自己の運動の目的と敵対するという認識が率直に示されている。そして、「現実の世界に於て、小民族の分立は決してその国家の安全を保証し、その民族の福利を増進する所以ではない」（五五頁）、「尊敬すべき我々先輩にも歴史の大勢を捉へるのに手ぬかりのあったことを知る」（五六頁）等とされているように、諸民族の統合によって歴史的必然たる「世界最終戦」を迎えんとする東亜連盟論が曺のそうした信念を支えていた。

そして、これと対照的に、朝鮮人同化政策への批判は後退あるいは消失した（五五頁）。

「合邦三十年にして光輝ある総督政治の威観あったにも拘らず……朝鮮人は返（ママ）って束縛に近い煩ひを感じ、果ては些細のことまで日本民族

の指導干渉を受けるやうになってからは、我々は被圧迫民族だとまで弱音を吐く様になったことを忘れてはならない。今日の同胞は、心を静かにして内鮮問題を検討しようとする落着きすら見せない極めて感情的な変り果てた姿である」。

ここには、かつてのように朝鮮人差別の実態に目をつぶり同化政策を強要する日本に向けた批判はほとんどなく、主客転倒し、「光輝ある総督政治の威観」や「正しい日本の姿を直視」（五五頁）しようとしない朝鮮人への叱責あるばかりである。在日朝鮮人統制機関協和会の教育方針についても「日本語の教へに止まり家庭刷新を目標にしてゐない」、「先生自身が、朝鮮人家庭に出入することがない」などという点を問題にした（五九頁）。当局の同化政策を是認し、さらにその徹底を求めたのである。

一九四一年をはさみ数年間の間に曺の思想に生じたこのような転換は、石原も知るところだった。やや後のことだが、石原は曺の思想遍歴について次のように述べている。[41]

「曺君は最初不当なる民族差別に憤慨して独立運動者になった。所が京都に来り、福島清三郎先生の柔道の塾に入ると……彼は『曺先生、曺先生』と敬はれた。これで彼の独立意識はグニャ〳〵になってしまった。そこに与へられたのが……東亜連盟理論である。『全くさうだ、朝鮮の独立の如きは時代錯誤の罪悪である』とはっきり判ったので……君国のため朝鮮同胞にその信念を宣伝したのである」。

さて、曺以外の運動指導者について、このような思想転換の過程は、資料の制約上跡づけにくいが、梁麟鉉の場合も簡単に見ておきたい。一九三九年末に曺と接触し、翌年同志社朝鮮学友会会長となった梁は、留学生への東亜連盟運動の拡大に力を入れた一人である。かたわら、学友会会長として、朝鮮人学生のいる各学校を回って在京都朝鮮人留学生五百名分の名簿を作成、配布したり、京都三条の朝日会館で朝鮮人舞踏家趙澤元の公演会を催したりし、京都府警察部特別高等警察課からは「冬眠していた蛇が起き出てきた」と警戒されていたという。[42] 同胞の団結と民族文化の維持に奔走していた梁は、曺と同様、東亜連盟運動に民族意識抹殺政策に対抗できる場を見いだそうとしていたと考えてよいだろう。

しかし、その一方で、梁は一九三八年から実施された朝鮮人志願兵制度に対し、四一年次のように語ったことが記録されている。[43]

「此の時局下に於て朝鮮人のみは徴兵制度がなく又徴用もない。内地人が赫々たる武勲を輝して居る時、吾々は……直接何の役にも立てて貰ふことが出来ず実に淋しい限である。政府も民族問題に神経質にならず思ひ切って朝鮮人を徴用して見てはどうか。……此の機を逸するならば吾々朝鮮人は永久に取り残されることになり向上心を失ふ」。

民族差別体制の恒久化を懸念する切迫した心情は窺えるものの、かかる論理の先には、朝鮮人がひたすらに日本人化する以外の道はない。そ

して、梁が石原と十回以上会い石原の個性にひかれていたことと、その石原（あるいは東亜連盟論）が一九四〇年以来、朝鮮人徴兵制を唱え、四一年の運動の変質以降はさらにその声を強めていた[44]という事実とを重ね合わせてみるならば、梁の主張の背後に東亜連盟論の影響があったことは否定しがたい。梁は、後に東亜連盟運動への関与により検挙されると、被起訴者の中ではただ一人、自分の運動が「独立運動」だったと主張しており（後述）、胸中は複雑だったに違いないが、彼の場合も同様の思想転換は免れていなかったように思える。曺の表現を借りるならば、彼らは、「民族自決運動に参加せる……情熱」を「内鮮協和実現に置きかへ[45]」ていったのである。

2　朝鮮人学生の組織化と運動参加者の意識

曺寧柱、趙恩済、梁麟鉉ら在京都朝鮮人留学生組織の指導者たちは、東亜連盟運動を朝鮮人学生の間にどのように浸透させようとしたのか。まず、事実経過を追ってみよう。

一九四〇年四月中旬および下旬、曺寧柱は趙恩済と会合し、彼らの母校たる立命館大学の朝鮮人留学生への東亜連盟論の宣伝、そのための新入学生歓迎会の利用について相談を行った。同月下旬、梁麟鉉も曺から東亜連盟論の説明を受けている。同月末、曺は、義方会道場にて、梁・趙に対し、読書会を通じて京都帝国大学・同志社大学・立命館大学各留学生を会員として獲得することについて協議した。梁が、京大と第三高等学校、同志社大の学生を、趙が立命館大の学生をそれぞれ勧誘することを決めている[46]。

朝鮮人新入生を迎えようとする一九四〇年春、宣伝・組織活動の段取りが本格化したのである。以後の運動の拡大の様子を年表風にまとめると表1のようになる。

表から明らかなように、同調者の獲得は、しばしば学友会の行事や会合を利用して行われた（②⑥⑦⑧）。この他、曺が在京都朝鮮人学生を戸別訪問したり（⑨）、学生と日本人家主との間で下宿の斡旋をしたりすることで同志を得ようとしたともいう[47]。いずれにせよ、この運動では、運動への勧誘対象はほぼ朝鮮人学生層に限られていたといってよい（曺は京都嵯峨野に夜学を設置して朝鮮人労働者を引きこもうという腹案ももっていたようだが、これは実現していない[48]）。

主たる活動形態は、曺を塾頭とする義方会協和塾での学習会だった。十名前後ないし二十名程度の規模で、一九四〇年、四一年にはそれぞれ、半年ないし一年間で約三十回から六十回という相当の頻度で会がもたれた（③④⑩）。学習会の内容は、テキストとして雑誌『東亜連盟』や

表1　在京都朝鮮人留学生による東亜連盟運動の展開

年		事項	出典
1940年	①	四月中旬、立命館大学構内で、趙恩済が金鐘煥・南宮己石に東亜連盟論を解説する。	A、九丁。
	②	四月二八日、京都嵐山公園で行われた朝鮮人新入学生歓迎会で、曺寧柱・趙恩済が、南宮己石、金鐘煥、金炳淳ほか、立命館大学・同予科・同専門学校・同高等商業学校・同高等工業学校の四十名余りに東亜連盟の理論について解説し、朝鮮民族の「政治の独立」の獲得を力説する。	A、五丁。B、八二八～八二九頁。
	③	四月から翌四一年二月まで、義方会協和塾において、曺寧柱が、斉藤謙蔵（満洲国協和会職員）とともに、週一回、京都大学・立命館大学・同志社大学の学生および［満州国からの？］留学生蒼永新、王新厚等十数名に、『東亜連盟建設綱領』『昭和維新論』『世界最終戦論』をテキストとして研究会を持つ。	B、八三〇頁。
	④	五月、義方会協和塾で、曺寧柱、趙恩済、梁麟鉉、金鐘煥、金炳淳、南宮己石、呂運讃、郭在寛、白、崔、金を中心に、今後の東亜連盟論研究の方法について討議する。同じ頃、曺と梁の間では、学友会の会員に対して東亜連盟論の宣伝を行うことが決定される。これ以後一一月にかけ、約三十回（十数回とする資料もある）にわたり、曺、梁、趙らが十数名の学生とともに義方会で『東亜連盟建設綱領』等をテキストとした学習会を行う。	A、六丁。B、八二九頁。C、七四頁。
	⑤	六月一日、曺寧柱が、東亜連盟運動に懐疑的な朝鮮人学生約十名を京都師団長石原莞爾のもとに引率し「東亜連盟理論と朝鮮問題」についての談話を聞かせ、懐柔を試みる。	B、八二八～八二九頁。
	⑥	一二月、京都三条の朝日会館で開いた京都朝鮮人学友会委員会で、曺寧柱が、趙恩済、梁麟鉉、朴（第三高等学校）、崔（立命館工業高等学校）、洪（同志社高等商業高校）他二十数名に対して、「昭和維新」とそのもとでの朝鮮解放の可能性について宣伝する。	B、八二九～八三〇頁。
1941年	⑦	一月一八日、京都朝鮮人学友会の卒業生送別会で、曺寧柱が、東亜連盟運動における「民族協和」論に朝鮮民族を包摂し、同運動による朝鮮民族解放を示唆する発言をする。	D、一〇五七頁。
	⑧	この年初め、京都植物園昭和会館で開いた京都朝鮮人学友会総会で、曺寧柱は、趙恩済、梁麟鉉その他中学校生徒約二十名に対し、東亜連盟論の宣伝を行う。	B、八三〇頁。
	⑨	四月、義方会に東亜連盟協会関西事務所が設置され、曺寧柱は京都支部職員となる。以後、八月中旬まで京都に在住する二百名近くの［京都朝鮮人学友会の？］会員を戸別訪問し同志獲得に奔走する。	A、二丁。B、八三〇頁。
	⑩	六月、曺寧柱が、朴貞基、朴栄基等に東亜連盟論を宣伝し、同志の獲得を指示する。以後一一月下旬にかけ、義方会協和塾で、梁麟鉉、朴貞基、朴栄基、文浩烈、朴瑋桂、金鍊洙、朴ほか二名に対し約六十回の学習会を行う。	B、八三〇頁。
	⑪	九月、東亜連盟協会関西地方事務所一泊講習会が開催される。京都支部からの受講者二八名中には、曺寧柱、梁麟鉉、朴榮基、朴貞基、李義勲（伊東勲）、文弘然、朴瑋桂ら朝鮮人の参加が確認される。	E、一二四頁。

出典：A―「曺判決」。B―『社会運動の状況』1942年版。C―「梁判決」。D―『特高月報』所収「在日朝鮮人運動日誌」（『集成』4所収）。E―「東亜連盟協会ニュース」（『東亜連盟』第3巻第11号，1942年11月）。

『東亜連盟建設綱領』の他、東亜連盟協会編刊『昭和維新論』（初版は一九四〇年三月刊）、石原莞爾『世界最終戦論』（立命館出版部、一九四〇年九月）などを用いた理論学習が中心だった。このような学習会には、日本人運動者の参加はほとんど確認できず（ただし、③のみ日本人や満洲国留学生らしき名が見える）、この点でも、彼らの運動は朝鮮人学生のみで独自に進められたという性格を強くもつ運動だった。

ともあれ、こうした働きかけの結果、潜在的な共鳴者はかなり生まれた。学習会に参加していた平安中学校生徒の文鶴東は、「世界最終戦論」や朝鮮「自治」論について述べた石原の講演（一九四〇年頃か）に、三百余名の朝鮮人学生が集まり、義方会道場は立錐の余地もなかった、としている。[49] また、京都帝大留学生の大川真江（朝鮮人、本名不詳）は、一九四一年夏の帰省中、「京都帝大、同志社、立命館大学等の朝鮮人学生は『東亜連盟』運動興味を抱き研究熱旺盛となり、之等学徒に依り東亜連盟の組織体が出来ている」[50]と語っている。

このように東亜連盟運動に在日朝鮮人が参加したことは、運動全体から見ればかなり特異な現象だった。例えば、⑪の関西地方事務所一泊講習会では、京都支部からの参加者二八名のうち、朝鮮人と思われる者は七名を数えるが、京阪神・名古屋・四国・岡山から総数一一〇名が参加したこの講習会で、朝鮮人の参加を確認できる支部は京都以外にない。後に一九四三年頃になると、名古屋・大阪などにも朝鮮人を主体とした東亜連盟運動の組織が現れてくるが、四〇年頃の時点でそうした組織が確認されるのは京都のみである。当時の京都は、石原莞爾が住み（一九四一年九月に鶴岡市に移るまで）、四一年四月には東亜連盟協会関西事務所が設置されるなど（前掲表1の⑨参照）、東亜連盟運動前半期における中心地の一つとなっていたが、[51] ある程度、組織だった朝鮮人の参加が見られたという点でも際立った地域だったのである。

それでは、東亜連盟運動に参加した在京都朝鮮人学生たちは、この運動のどのような点に関心を持ち、どの程度運動に没入したのだろうか。

当時、朝鮮人留学生の民族意識には鮮烈なものがあった。少年時代から日本に暮らし一九三九年に同志社大学予科に入った韓晳曦は、数十人の朝鮮人学生を集めた新入生歓迎会において、在日定住者が自分だけだったこと、集会は「民族や独立など深く考えたこともなかった私には、あまり魅力のある集まりではなかった」ことを率直に記している。[52] 在京都朝鮮人学生においては、朝鮮からの留学生が大多数であり、その意識は在日朝鮮人一般と比べ相当に先鋭だったことが知られる。こうした朝鮮人学生の参加者が関心を向けた焦点が、東亜連盟運動の理論体系全体というよりは、とりわけ民族文化の「維持」や朝鮮「自治」論といった朝鮮問題に関わる論点だったことは疑いない。先述のように彼らが朝鮮人学生だけでまとまって運動していたこともそのあらわれだろう。

民族文化の「維持」については、東亜連盟論の学習会で、「日本に対する不平が多く出た」と曺はいう。[53] 官憲資料の伝えるところでは、学習

会においては、曺から、朝鮮人各家庭に神棚の設置を強制していることに対して「信仰は強制すべきものではない」との「不敬の言動」がなされたとか、朝鮮史・朝鮮経済などの研究が行われた、などとしているが、ありうることだろう。[54]

朝鮮「自治」論に対する関心については、前述の大川真江が「大体東亜連盟運動なるものは民族の自治といふ点に大歓迎を受け居るものらしい」と述べている。梁麟鉉・福島清（注(14)参照）ら活動の現場を知っていた者も、それぞれ、日本人の東亜連盟運動参加者は「『世界最終戦』のために運動をしたが、自分たち［朝鮮人］は朝鮮の独立を考えながら運動をした」、「一四、五名の方が週に一度東亜連盟の講義を受けておられた。学生が七割で、東亜連盟の内閣が出来れば朝鮮も独立できると希望にもえておりました」等と証言している。[55] これら後年の回想の信頼性には若干の保留が必要だが、両者は大筋で一致している。朝鮮人学生の中から、東亜連盟論を学習しようとした者が十～二十名という規模で現れた背景には、東亜連盟論の説く朝鮮「自治」論の訴えるところが大きく、参加者のかなりの部分が「自治」論に朝鮮独立の展望を仮託しようとしたものと推測される。

しかしながら、参加者の多数がそのような志向をもっていたならば、それは、東亜連盟運動あるいは曺寧柱の思想の中に当初から伏在し、一九四一年以降顕著になった朝鮮独立否認論や朝鮮人「皇民」化政策への容認傾向などと、必然的に衝突し、不協和音を発することになろう。実際、運動内部からの批判は初期段階から生じていたようである。一九四〇年六月、「朝鮮人学生が『内地人と共にする運動に朝鮮人に有利なる運動があり得る筈なし』と称し」懐疑的姿勢を示し、学習会も「停頓勝ち」になったので、曺は、メンバーを引率し、「石原莞爾中将を其の師団長官舎に訪問し石原中将より『東亜連盟理論と朝鮮問題』に就て意見を聞」いた（前掲表1の⑤）。曺が朝鮮人学生約十名を率いて訪れたことは石原の日記にも記されている。[56] 会見の中味は同時代の資料には伝えられていないが、一行に加わっていた梁麟鉉は、かなり詳細にこの時のことを記憶している。[57] 東亜連盟論が朝鮮に対して付与しようとしているのが「政治の独立なのか、行政の独立なのか」という点を曺に問うたが、明答を得られず、石原を訪問することになったのだという。

「晩、将軍官舎で［石原に］お目にかかったが、驚いたのは、応接室に本がずらりと並んでおり、マルクス全集が十巻余りあり、赤鉛筆が引いてあり、将軍が広範囲の読書で留学生の尊敬を受けたということである。また、我々が将軍の前で畏縮し、ろくに言葉も出ないでいるのを、雰囲気をよくするため、椅子にまたがり……〝五千年歴史ある民族を一体化するとは無理ぢゃ！〟と、南総督［南次郎朝鮮総督］のことを言われながら我々を歓待して下さった。高度の自治になれば、李王殿下が朝鮮を統治されるのだとはっきり言われたが、独立という言葉は出てこな

かった」。

おそらく運動参加者たちは、石原の個性に圧倒され、民族文化の「維持」や朝鮮「自治」論が石原自らの口から確認されたことに強い印象を受けながらも、根本の朝鮮独立論に対する東亜連盟運動の立場になお疑念を拭いきれなかったのではないだろうか。梁の回顧によれば、この翌日、曺と学生たちは会合をもち、「高度の自治か独立か」について議論を戦わせ、「連盟成立後、輿論を起こし独立を達成することとし、できなかった場合は蜂起して達成すること」を結論として得たという。このような運動方針があったことは官憲資料にも記されており[58]、ある程度事実に近いかと思われる。

もっとも、朝鮮問題の解決をせいぜい日本人の覚醒に期待する程度の立場だった曺が、朝鮮人学生のこうした声を受けいれたとは到底考えられない。おそらく、朝鮮人学生は東亜連盟論を知るにつれ、曺の思想（あるいはその背後の石原・東亜連盟論の朝鮮論）との越えがたい隔たりに気づかされていくことになったのではないか。学習会では、曺に対して「日本に飼われている」との非難が投げつけられることが多かったという[59]。また、石原によれば、運動の圏外にいる者からの攻撃も含めての評と思われるが、曺は、「日本の犬とのしられながら君国のため朝鮮同胞にその信念を宣伝した」（傍点―筆者）とされている[60]。

曺と朝鮮人学生の間に運動組織としての一体感が実はかなり乏しかったことの傍証は、前掲表1からも探ることができる。表中、④と⑩によって、一九四〇年と四一年の学習会参加者を対照させてみると、姓名の判明する限りでは、曺寧柱・梁麟鉉・趙恩済を除くと重なりあうメンバーがおらず、大半は半年間の学習会の後には運動から離れたようである。参加者が留学生という流動的な身分だったことは考慮しなくてはならないにせよ、学習会に固定的参加者がほとんどいなかったのは間違いない。また、表から明らかなように、主だった活動は、一九四一年一一月頃には終わっている（⑩）。翌年春に曺らは検挙されるが、それ以前に運動は事実上行き詰まりを見せていたのである。曺自身、一九四二年初頭、この点を暗に認めており、「以前同志獲得に焦って、朝鮮青年を一挙にして掴まんものと、多数集めて見境ひなく研究を進めて見たが、些かの成果をも見」なかった、としている[61]。

なお、こうしたことの結果として、朝鮮人学生たちには、学習会に参席する以上の運動への関与は乏しく、結局京都の運動に参加した朝鮮人の中で、ある程度東亜連盟運動全体の意思決定にまで関われる立場にまで至ったのは、曺寧柱一人だった。曺は、東亜連盟協会の京都各大学学生座談会（一九四〇年五月）、第一回全国支部代表者会議（四〇年一〇月）などに参加している[62]。さらに後になると、第四回関西地方中央参与

会員会議（一九四一年九月）や京都支部第二回参与会員会議（四二年三月）に出席して朝鮮問題の討議に関わっており[63]、東亜連盟運動の「中核」と位置づけられていた参与会員の地位に、この時期にはついていたことが判る。他の朝鮮人については、このような活動は確認できない。

また、曺は、朝鮮における東亜連盟運動とも交渉をもち、中心人物の姜永錫や連絡担当員の藤田源太郎（日本人）と少なくとも二、三度接触しているが、曺以外の者はこれに関わった形跡がない。曺に次ぐ指導的立場にあった梁麟鉉も、姜永錫について「曺寧柱と連絡がたびたびあったのは知っていたが、［梁自身は］接触したことはなかった」としている[64]。

3　運動指導者への弾圧

一九四二年三、四月、曺寧柱ら六名が検挙された。東亜連盟運動を利用して朝鮮独立運動を行ったとして、治安維持法違反の容疑に問われたのである。曺に代わる指導者のなかったこの運動は、これによって終結した。曺らが朝鮮人学生の組織化に着手してから約二年後のことである。検挙者とその処分は表2の通りである。

検挙者六名のうち実際に起訴されたのは、運動に当初から関わっていた曺寧柱、趙恩済、梁麟鉉の三名だった[65]。起訴猶予処分になった他の三名は曺らの同志獲得の活動により共鳴者となったという程度の者だろう。この点に関して、曺は「［入獄後］半ヶ年足らずして関係者からは裏切られ、一人ぽつねんと居残りされた時には煮え湯を飲まされた感じであった」と出獄後述べている[66]。あるいは不利な情報を当局に流されたのか。いずれにせよ、同志との一体感が意外に乏しかったことを曺は運動の最終局面でもあらためて思い知らされたのだった。

ところで、検挙の意図が那辺にあったかについては、当時、対照的な二つの見方が存在した。治安当局者は、この事件を、もっぱら「朝鮮人民族主義分子の東亜連盟理論を利用せる策動」「国家主義運動を利用せる朝鮮独立運動」という見方から説明しようとした[67]。これに対して、東亜連盟運動に参加した日本人運動者の側では、朝鮮独立運動の企図など「特高、憲兵の東亜連盟抑圧の口実」にすぎないと見ていた[68]。石原も、朝鮮人参加者への弾圧を気にかけつつ、同様の見方をとっていたようである[69]。

本章第1節で考察したように、指導者たる曺の意識を見るならば、この運動を治安当局側のように「独立運動」と規定することには明らかに無理がある。かといって、後者のように、これを全くのフレームアップとする見方も必ずしも事実に合致しない。

東亜連盟運動が治安当局に監視すべき対象と認識され、『特高月報』に活動状況が掲載されるようになったのは一九四〇年七月からであるが、

特高警察はその時点で早くも、同運動が「その内政の独立民族の協和なる主張等よりして朝鮮人の民族意識を刺戟し、之が民族運動を煽るが如き結果を招来する虞あり」と指摘している。[70] 翌四一年初めには、先述のように、東亜連盟運動全体への圧迫が始まるが、それ以降の時期の政府・民間の文書にも同様の危惧が示されている。[71] また、前述の如く、運動周辺の参加者の言動からは朝鮮独立論の影が見え隠れしていたことも、そうした懸念を裏づけるものとなったと思われる。『京都府知事引継文書』一九四一年分には、京都朝鮮人学友会の動向について、府警察によるものと思われる次のような記述がある。[72]

「新東亜建設八紘一宇ノ顕現等表面時局相応ノ団体ナル如ク装ヒツヽアルモ依然トシテ偏狭ナル民族的偏見ヲ固執シ団体員ハ勿論一般在住朝鮮人ニモ直接間接ニ民族意識ノ啓蒙昂揚ニ努メ……居ルノ状況ニ付キ之等ノ動向ニ関シテハ厳重視察内偵中ナリ」。

曺寧柱や梁麟鉉が指導していた学友会の運動が、体制順応の方向に進んでいることを知りながらも、なお当局の眼から見て、胸底に民族意識

表2　在京都朝鮮人の東亜連盟運動指導者に対する検挙・処分

姓名	身分・職業	年齢	検挙・処分	出典
曺寧柱（石島寧柱）	東亜連盟協会職員	29	42・3・18検挙→8・3京都地方裁判所検事局へ送局→11・9起訴→43・12・27判決（懲役二年、執行猶予二年）→44・1釈放	a、八三二頁。b、一～二丁。c、一〇八〇頁。
趙恩済（安藤恩済）	蓄音器音針卸売業	29	42・3・18検挙→8・3京都地方裁判所検事局へ送局→10・24起訴→43・12・27判決（懲役一年六ヶ月、執行猶予二年）→44・1釈放	a、八三二頁。b、一～二丁。c、一〇七九頁。
梁麟鉉（梁原剛一）	運動靴製造販売	26	42・3・18検挙→8・3京都地方裁判所検事局へ送局→10・24起訴→43・4・21判決（懲役一年六ヶ月）→43・4福岡刑務所へ移送→44・4釈放	a、八三二頁。c、一〇七九頁。d、七五頁。e。
権正栄（安原常吉）	立命館大学学生	21	42・3・18検挙→6・24起訴猶予→11・2保護観察処分	c、一〇八〇頁。
【本名不明】（河村泰煥）	立命館大学学生	27	42・3・18検挙→10・27起訴猶予	c、一〇八〇頁。
朴商洪（井村商洪）	無職	22	42・4・1検挙→10・27起訴猶予	c、一〇八〇頁。

出典：『特高月報』1942年3月分（『集成』4，975頁），同前1942年8月分（『集成』4，995頁），『思想月報』第99号（1942年11，12月）231，235頁の他，a—『社会運動の状況』1942年版。b—「曺判決」。c—『特高月報』所収「在日朝鮮人運動日誌」（『集成』4所収）。d—「梁判決」。e—梁麟鉉，前掲私信。

注：1．「姓名」欄の（　）内は創氏改名による氏名。
2．検挙者姓名の内，「権正栄」を「権承正」とする資料もあるがどちらが正しいか明らかでない。
3．「年齢」は原資料の誤りと思われるものは訂正している。
4．「検挙・処分」欄の数字は、年・月（・日）をあらわす。

を隠しているのではないかという薄気味悪さは拭えなかったのである。東亜連盟運動が朝鮮人の民族運動を誘発しかねないとする見方は、運動抑圧のために捏造された「口実」というよりは、治安当局にとって一定の実感を伴ったものであり、基本的には、そのような警戒感の延長線上に曺らの検挙が行われたと考えるのが妥当だろう。[73]

こうした当局の認識は尋問にも反映された。曺は、当初、京都・五条警察署の拘置所で特高警察から、「飽きもせずに同じ訊問を」繰り返された。とりわけ朝鮮「自治」論について追及され、「民族感情を刺激する東亜連盟は、朝鮮と日本を離間させる危険な団体だ」と決めつけようとするものだったという（「曺回顧」C、二四三頁）。梁の場合も、取り調べ側は同様の態度だった。[74]

このような取り調べに、被疑者たちの答えは分かれた。曺の場合、「絹糸で全身を縛り上げられたり、水責め火責めのあらゆる拷問（ママ）」を受けたが、[75]獄外の石原等と同様、当局の論理は「詭弁を弄し毛を吹いて疵を求めんとする」ものとしてはねつけ（「曺回顧」A（一）、一七頁）、検事と予審判事に対し次のような主張を通そうとした（同前B、二八六頁）。

「民族感情必ずしも独立思想につながらない。感情的には自分勝手な独立をやりたいけれど、ちょっと不満だが東亜連盟的に考えた方が民族の幸福をもたらし、なお歴史の流れに沿うということであれば、民族は感情を自制してそちらの方に進むべきだ。……私は民族意識だけで感情的な独立運動につっ走るほどの理不尽な男ではない」。

他方、梁麟鉉は独立運動である旨を言明した。石原によれば、「『独立運動を曺君より煽動された』と述べた」のは、拷問による強制的自白であることがほのめかされているが、[76]梁の自白にまったく本心が投影されていなかったのかどうか、今にして見定めることは難しい。

曺に対する判決は一九四三年末に下され、懲役二年執行猶予二年となった。判決では、「朝鮮カ独立ヲ獲得シ得ルモノト做シ東亜連盟運動ヲ利用シタル点」は結局、事実として認定された[77]ものの、検事側の求刑五年をかなり下回る判決となった。これに対し、梁には八ヶ月早く判決が下り、執行猶予なしの実刑判決で懲役一年六ヶ月が言い渡された。首謀者の曺より重刑になったわけである。

曺は、先に梁の方に判決が下されたことについて、法廷で、「関係者を先に処刑したのは、如何にも私を有罪にする前提でこの公判をひらいたとしか考えられない……と食ってかゝった」（「曺回顧」A（二）、九頁）。曺は、長い拘禁生活で体調を崩してはいたが（同前、七～八頁）、意気軒昂だったといえよう。一九四四年一月判決が確定し、釈放されると、曺は上京し、さらに東亜連盟運動に挺身することになる。

Ⅲ　その後の曺寧柱

曺寧柱は一九四四年初めに出獄し、約一ヶ月後東京に移った。戦争末期の東亜連盟同志会で、和田勁（会長）、石原六埌（石原莞爾の弟）、増川喜久男、淵上辰雄らとともに本部を切り回したという。[78]

この時期の曺の大きな変化としては、日蓮教への傾倒があげられる。曺は、獄中で日蓮教に帰依し、「『法華経』『日蓮』とあらば、どの本であれどの著者であれ」読みあさり（「曺回顧」C、二四九頁）、上京後は精華会本部で起居するようになった（同A（二）、九頁）。精華会は、石原莞爾の師事した日蓮主義者田中智学を創設者とした国柱会から、一九三四年に派生した組織である。国柱会の若手の日蓮教信者によってつくられた同会は、東亜連盟運動に対する圧迫の強まる一九四一年頃から、熱心な東亜連盟運動員の活動の場にもなっていた。こうして上京後の曺は、特に田中智学の著作を通じて日蓮教の理解に努めるとともに、精華会機関誌『王道文化』の誌友となり、[79]同誌発行人歌川平次郎宅で、保坂富士夫、高木清寿、小泉菊枝、伊地知則彦ら、精華会やまこと会（精華会の姉妹団体）などの活動家とも頻繁に会合をもつようになった。[80]

自身も日蓮教信仰の篤かった石原は、曺の入信を喜び（「曺回顧」C、二五一頁）、大きな信頼を寄せるようになった。例えば、出獄直後、曺は石原の紹介状をもって朝鮮に行き、陸軍石原派の中心人物たる朝鮮軍司令官板垣征四郎に面会し、さらに、東亜連盟運動に賛同していた朴熙道、張徳秀、宋鎮禹ら旧民族主義右派の人士、および中道左派の中心的人物呂運亨らと京城で会合をもち、日本が戦争に敗れるとの石原の予測を伝えたという。[81]また、一九四五年に入ってからのことと思われるが、東亜連盟運動にも参加し、満蒙開拓青少年義勇軍を訓練していた茨城県の内原訓練所所長加藤完治のもとへ、曺が自筆の『満蒙開拓指導要綱』なる分厚い原稿を携えて訪れたという。内容の詳細は不明だが、満蒙開拓についての石原の腹案を曺に書かせたものだったらしい。[82]いずれも断片的で十分な裏付けのとりがたいエピソードだが、当時の曺が、石原の秘書ないしメッセンジャーともいうべき役割を果たすほどに信頼関係を深めていたことは理解されよう。

さらに、日蓮教への帰依は、思想的な面でも、石原の思想の根底にある宗教観・国体観を受容させたという大きな意味をもった。曺の吸収した田中智学の日蓮主義解釈は、石原の「世界最終戦論」に、黙示録的予言性と国体信仰の要素を与えた重要な成分に他ならなかったからである。[83]一九四四年一〇月、曺は『王道文化』に「日蓮主義と朝鮮民族」という一文を寄せている。前段では入信に至る思想遍歴を述べ、後段では、日蓮の予言したいわゆる「前代未聞の大闘諍」――石原の思想においては「東亜連盟」をもって迎えるべき「世界最終戦」に比定された――に関

わって以下の如く論じた[84]。

「来たるべき大闘諍は数十年後に近迫してゐる。世界平和を撹乱する愚王に一大鉄槌を下す賢王が、日本皇室の御直系であらせらるべきとは自明の理である。……天地間の真理正義が不滅なる限り、万邦の諸民族が陛下（ママ）の御稜威を畏み奉る時機の到来することも亦不可避必然である。この必然的世界統一に吾々朝鮮人も陛下（ママ）の赤子と相成り全人類を救済する一役を買ひ得たことは光栄亦これに過ぐるものがあらうか」。

日蓮教への帰依により、曺の思想には、従来あからさまには表れていなかった天皇制賛美が加わり、それによって対日協力は必然的な義務にまで高められたのである。

このような認識をもって、曺は以前にもまして東亜連盟運動に邁進することになった。獄中で日蓮教に触れ、「仏の思召を昭和の御代に実現せんとする……東亜連盟運動に自分は果して粗漏なかったか」と自問し、強く「慚愧の念」にかられたと記している[85]。「東亜連盟工作員として全国をまわった」のも、出獄後間もないこの頃のことだろう[86]。なお、このことを伝える『特高月報』の記事（注(86)参照）には、曺を含めた講師の発言内容が「本会［東亜連盟同志会］の主張貫徹するに非ざれば戦勝の方途なき事を強調」しているとの指摘があるが、戦時体制支援の一翼を担う方向に向かっていたとされるアジア・太平洋戦争期の東亜連盟運動の性格は、当時期の曺の言動にも刻みこまれている。

日本敗戦を前にした一九四五年春、曺は「赤坂油池『士道館』に移り、昼間は某工場半島徴用工の指導に当り、夜間は『空手術』の道場を開いて子弟訓練に当って」いた[87]。この内、朝鮮人徴用工の監督・指導は、出獄した年（一九四四年）から始まったもののようであり、その様子は『朝日新聞』の社説で大きく報じられた[88]。数百人の朝鮮人徴用工を抱えた川崎市のある工場では脱落者・逃亡者が皆無という好成績をあげているが、「それは専ら、時代認識に徹し、この戦争の本質を正しく把握し、国体護持の信念に徹した一半島同胞曹（ママ）寧柱氏の人格とその指導とによるものである」として、次のように書かれている。

「彼等の標語は『東亜の大同』であり、『民族協和』であり、『東亜の保全』である。日華両国が心からなる真和平を実現し、王道に則った東亜大同の第一歩を踏み出すことができるならば、支那事変ならびに大東亜戦争の大犠牲は、これを十分に償ってなほ余りあり、それこそ正しく世界史に新たなる一頁を開くものであるとの信念に徹してゐる」。

その一方で、曺は、一九四四年七月頃、友人の権逸（元満洲国司法官僚、東亜連盟論者）に諮られ、朱基榮（牧師）とともに、朝鮮総督府政

務総監遠藤柳作への建議書提出に加わった。建議書の内容は、日本戦勝の暁に朝鮮独立をさせるという詔勅の即時発表、朝鮮内での政治活動の自由の即時承認、戦後の混乱の未然防止のための在日朝鮮人有志との連携などを求めるものだったという。[89] もっとも、同じ頃、曺は小磯国昭内閣の発表した朝鮮人・台湾人への参政権付与などのいわゆる「処遇改善」の方針に対し、「民族処遇ニ就テハ非常ニ好感ガモテタ」という感想を漏らしてもいる。[90] さらに、一九四五年一月頃、同内閣による「処遇改善」実施に感謝すべく結成され、地下航空機工場建設のために朝鮮人動員に荷担したとされる一心会にも、勤労部長として名を連ねた。[91]

以上のように、曺は終局的に、天皇を盟主とした「東亜連盟」のもとで、日本人と朝鮮人の一体化・平等化が実現することを理想とした。その発想が、天皇制国家支配層の温情に期待し、多分に自発的な戦争協力を推進する姿勢に至ったことは、曺にとっては自然な道筋だったに違いない。しかし、そのことは、戦後、在日朝鮮人運動主流が、曺に、ひいては東亜連盟運動に対して抱くイメージにも大きく影を落とすことにもなるだろう。

一九四五年八月、曺は、石原六埴を通じて広島への原爆投下を知り、東京にとどまることの危険を感じ、権逸とともに群馬に疎開、日本の敗戦を迎えた。[92]

戦後、東亜連盟運動は短期間の旺盛な活動の後、一九四六年一月、東亜連盟同志会が連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の解散指定を受けたことで、社会的影響力をもった運動としては事実上幕を下ろした。この後、同志は石原周辺や精華会などに集まったが、曺も、石原の隠棲した山形県飽海郡の西山開拓農場をたびたび訪れている。[93] 一九四七年には、極東国際軍事裁判酒田法廷で、証人として召喚された石原の発言を記録し、四九年、石原が死を前に三人の同志のみに託した『日蓮教入門』の共同執筆・編集に加わった。また、一九四八年から翌年にかけて曺の執筆した文章には、共産主義への批判が多く見られ、日本共産党員との討論の様子を記したものもある。[94] おそらく、石原の説いていたマルクス主義「釈伏」（「曺回顧」C、二五六頁）を曺なりに実践したものと思われる。曺は、石原の側に形影の如くしたがうとともに、特に反共という点でその思想の実践につとめたのである。

一九四九年八月、石原死去。同志から推されて告別式の式長をつとめた曺は、式後、会衆の前で、「私は朝鮮人です。故人の特別の恩顧は生涯忘却致しません。日本人のすべてが天皇陛下にそむいてもわれわれ朝鮮青年同盟は日本天皇を護持します」と述べた。[95]

石原を失った後、東亜連盟運動の後継者たちの間には分裂が生じた。[96] 東亜連盟同志会解散後、既に一九四六年五月には、公職追放を免れた会

員によって国民党が結成されていた（曺が参加していたかどうかは不明）。石原没後、一九五一年一一月、国民党は協和党に解消したが、同党の日本再軍備反対論に同調できない古参を中心としたメンバーは、翌年七月に東亜連盟同志会を結成した。かつての会名を冠したこの会に、曺も中心人物の一人として加わっているが、会勢は振るわなかったようである（なお、東亜連盟同志会からさらに自衛同盟が分派したが、曺は東亜連盟同志会にとどまった）。この一方で、曺は、一九五〇年代以降も少なからぬ文章を残している。[97] 石原に対する敬慕が生涯続いたことが判るが、管見の限りでは、極東国際軍事裁判酒田法廷での石原についての回顧的性格のものがほとんどである。

さて、こうした一面に加え、曺は、戦後在日朝鮮人運動にも足跡を残した。戦後、共産主義者の主導で一九四五年一〇月に結成された在日本朝鮮人連盟（朝連）は、創立初期に親日派や右派民族主義者を排除しながら、在日朝鮮人大衆のなかに組織基盤を確立しつつあった。曺は、共産主義者への不信から朝連には最初から参加しなかったというが（「曺回顧」B、一一八七頁）、朝連の側も曺を受け入れる余地をもたなかった。朝連は、対日協力者を激しく指弾し、東亜連盟運動関係者もそれに加えていたからである。[98]

この結果、戦後在日朝鮮人運動において曺が活動の場を見いだしたのは、親日派・民族主義者を結集した右派陣営だった。一九四六年一月、新朝鮮建設同盟に企画委員として参加、同一〇月、在日本朝鮮居留民団（後の在日本大韓民国居留民団。民団と略記）結成に際しては準備委員の一人となった。[99] 大衆的基盤に乏しく、長く獄中にあった朴烈を中心にその側近が集まって作ったとされる初期民団で、曺は「かげの総参謀格」ともいうべき位置を占めたといわれる。[100] その背景には、普通学校の時分、曺が朴烈の後輩にあたっていたという因縁もあったが（「曺回顧」B、二八八頁）、朝連と厳しく対立していた右派にとって、共産主義をいったん学びながら石原思想に乗り換えた曺が格好のイデオローグだったことも事実だろう。なお、京都時代、ともに東亜連盟運動に携わった趙恩済も、戦後、民団京都府地方本部（一九四七年結成）の初代事務局長となっている。[101]

曺は、これ以降、民団企画室長（四九年一〇月）、韓国駐日代表部諮問委員会政治部常任委員（五〇年六月）、大韓青年団長（五〇年八月）などを経て、一九六〇年七月から翌年五月まで民団団長を務めた。民団幹部としての曺に対する評価は、権力依存の体質を批判するもの、団長時代、在日本朝鮮人総聯合会（総連）との首脳会談を呼びかけ実現させた点を一定評価するものなど区々である。[102] この後、一九七六年から七九年まで再度民団団長を務めた。

戦後の曺についてはさらに考究すべき問題を含むが、ここでは、曺が、石原の心酔者と在日朝鮮人運動右派の重鎮という二つの顔をもってい

たという指摘にとどめておきたい。

おわりに

以上、本稿では、曺寧柱が指導者となり、東亜連盟運動の一環として、一九四〇年以降約二年間にわたり、在京都朝鮮人留学生を巻きこんで展開した運動を中心に考察した。

一九二〇年代、植民地朝鮮における社会主義の全盛期にその洗礼を受けた曺は、渡日後、運動への展望を失うと、東亜連盟運動に活路を見いだそうとし、朝鮮人学生の組織化に力を入れた。そして、同時代の在日朝鮮人運動一般に比べると、この運動に対する共鳴者の輪の広がりは例外的といってよい大きさをもつことになる。京都に限っても、一九四一年から四四年にかけ、在住朝鮮人が検挙・送局された事件一〇件のなかでは、曺らの運動はもっとも多くの検挙者を出したのだった。[103] 留学生という限られた参加者層ではあるにしても、戦時期においてのべ数十名を集めたこの運動は、在日朝鮮人の運動史上看過できない影響力をもっていたといってよい。

加えて、この運動には、この時代としては異例の広がりが見られた反面で、在日朝鮮人の先覚的部分たる留学生の思想状況が集約的に現れた。曺ら運動の中心部の者たちについて見れば、彼らは、朝鮮統治批判の視点をもった東亜連盟論にひかれつつ、結果的には民族意識が取りこまれ磨滅していくという過程を経た。この限りでは、体制への「批判」と「同調」という東亜連盟運動の基本的性格は、[104] 後者に比重をおきつつ、朝鮮・朝鮮人との関わりの中にもほぼ正確に投影されていたといえるだろう。しかし、他方で、運動参加者全体を見渡すと、「同調」の度合いは決して一様ではなかった。官憲資料が、「検挙当時に於ては本名［曺寧柱］の理論に共鳴せる朝鮮人は相当数に及び居たるが意識高度にして同志的交友の下に策動しつつありたるものは梁麟鉉外四名」[105] と評しているのは示唆的である。この運動は、石原に心酔し東亜連盟論と一体化した曺寧柱ら少数の指導者を中核としながら、東亜連盟論における朝鮮論や石原個人の人格に引かれつつも朝鮮独立論をめぐっては対立軸の存在を認識せずにおれなかった多数派の学生参加者がその外側を取りかこむ、という二重構造をはらみながら展開したのだった。

約二年間にわたる本運動の広がりと共鳴者の輪の中の二重構造こそは、東亜連盟運動の朝鮮人への浸透の度合いとその限界を反映したものだろう。と同時に、この運動は、戦時期日本における朝鮮人運動の困難と変質を具体的に示すとともに、体制に同調的な運動の内部にもなお朝鮮人の民族意識が残存していた極限の状況をも我々に教えている。

凡　例

(1) 引用文中の［　］は引用者による注記、……は引用者による略記を表す。また、引用文の漢字を当用漢字に改め、聯盟と記すべきところを連盟と表記するなど若干手を加えた。

(2) 「満洲」の括弧を省略した。

(3) 本稿では次のような略記を用いている（これ以外の略記は適宜記す）。

- 内務省警保局編『昭和一七年中ニ於ケル社会運動ノ状況』→『社会運動の状況』一九四二年版。
- 朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第四巻（三一書房、一九七六年）→『集成』4。
- 曺寧柱「入信の動機」（一）（二）（『王道文化』第一〇巻第二、四号、一九四九年二、六月）→「曺回顧」A（一）（二）。
- 長坂覚「韓国人と日本人――曺寧柱氏に聞く」（『中央公論』第九四巻第八号、一九七九年八月、長坂覚と曺寧柱の対談）→「曺回顧」B。
- 曺寧柱「石原莞爾の人と思想」（石原莞爾生誕百年祭実行委員会編『永久平和への道――いま、なぜ石原莞爾か』原書房、一九八八年）→「曺回顧」C。
- 曺寧柱「石原莞爾生誕百年祭記念特別講演」（『協和新聞』一九八八年一一月一一日）→「曺回顧」D。
- 曺寧柱「私は『驚きもの木』にこう語った」（『永久平和』第三五号、一九九五年一〇月。テレビ朝日系テレビ番組『驚きもの木二〇世紀』制作のため一九九五年七月に行われた聞き取りの再録）→「曺回顧」E。

注

(1) 先行研究については、石原莞爾生誕百年祭実行委員会編『永久平和への道』二六二～二七五頁の文献目録を参照。最近の成果では、特に森武麿・大門正克編著『地域における戦時と戦後　庄内地方の農村・都市・社会運動』（日本経済評論社、一九九六年）が、庄内地方での末端運動参加者の意識や行動を明らかにした重要な論考を含んでいる。

(2) 坪江汕二『朝鮮民族独立運動秘史』（改訂増補版、厳南堂書店、一九六六年）二四六頁。

(3) 「［曺寧柱、趙恩済に対する］判決」（一九四三年一二月、京都地方検察庁所蔵）二丁。以下、「曺判決」と略記する。なお、当時、京城には公立第一高等普通学校、同第二高等普通学校の二つがあったが、曺の在籍したのがいずれかは判らない。

(4) 『社会運動の状況』一九四二年版、八二四頁（『集成』4、八五四頁）。曺寧柱氏の筆者に対する談話（一九九六年二月二一日）によれば、学生による秘密組織らしき「三・一社」「改造社」などの団体の「使い走り」をしていた、としている。

(5) 『社会運動の状況』一九三二年版、一三八九、一三九五頁（『集成』2、三八九、三九五頁）、『救援新聞（大阪版）』一九三二年三月二六日。

(6) 「曺判決」二丁。なお、曺は、立命館大卒業後、一時、京都大学大学院農学研究科選科生（今日の聴講生に当たる）として農林経済学も学んでいる。

(7) 『救援新聞』一九三三年一二月二八日。

(8) 曺寧柱、前掲談話。「曺回顧」B、二八一頁。

(9) 趙甲済『朴正熙　韓国近代革命家の実像』（邦訳、亜紀書房、一九九一年）一七頁所載、趙甲済に対する曺寧柱の談話より重引。

(10) 朴相熙は、後年の大韓民国大統領朴正熙の実兄。朝鮮解放後、南朝鮮亀尾地域の左翼運動を指導したが、一九四六年、共産主義者による大邱蜂起の際、警察により射殺された。黄泰成は、朝鮮民主主義人民共和国から韓国にスパイとして送りこまれたとされ、朴正熙政権により処刑された。

(11) 「曺判決」二丁。

(12) 警視庁内鮮課「在京鮮人転向者の情況」(『思想彙報』第一三号、一九三七年一二月)一九八～一九九頁。

(13) 曺寧柱、前掲談話。「曺回顧」C、一九八頁。

(14) 以下、福島に関しては断りのない限り、筆者宛福島清氏私信、一九九六年一一月六日による。福島清氏は清三郎の子息で、自身も東亜連盟運動に関わっておられた。

(15) 福島清三郎「東亜連盟と武道」(『東亜連盟』第三巻第八号、一九四一年八月)七六頁。

(16) 曺を東亜連盟運動に接近させた間接的背景としては、曺の所属していた立命館大学が京都における運動の中心地となっていたこともあげられよう。立命館出版部は運動関係のテキスト類を多く出版しており、同大学には、中川小十郎(同大学学長)、田中直吉(同大学助教授)ら、熱心な東亜連盟論者もいた。

(17) 角田順編『石原莞爾資料――国防論策篇』(原書房、一九七一年)二六一頁。日記の記事中、曺と同行したとされる二人は、緒方敏行(当時、京大経済学部生)、益欽一(京大法学部生)で、両人とも社会運動の経験は特になかったという(曺寧柱、前掲談話)。

(18) 康太洙氏の筆者に対する談話(一九九六年六月二四日)。康氏は、一九四三年頃組織された東亜連盟同志会大阪青年部に参加し、日本敗戦直前の時期、大阪で石原と面会した。

(19) この点の考証については、拙稿a、七二～七三頁。

(20) 『社会運動の状況』一九四二年版、八二八頁(『集成』4、八五八頁)。

(21) 一九三九年～四〇年の石原「日記」に現れた朝鮮人名の一覧は、拙稿a、七三頁、参照。曺の名は八回あがっているが、石原日記の面会者の記録には遺漏も多いといい(白土菊枝『将軍　石原莞爾――その人と信仰に触れて』同刊行会、一九九二年、三五一頁)、曺も実際にはもっと多く石原に会っていたはずである。

(22) 福島、前掲私信によれば、「マルキストのかれ[曺寧柱]も三年たち東亜連盟に入会された」という。福島清三郎を知った一九三八年頃から「三年」して運動員になったというのは少し遅すぎるようにも思われるが、ともあれ直ちに加入しなかったのは事実だろう。

(23) 『特高月報』一九四一年九月分(『集成』4、七五九頁)。

(24) 『社会運動の状況』一九三八年版、九九五頁(『集成』4、九九頁)、『特高月報』所収「在日朝鮮人運動日誌」(『集成』4、一〇二一～一〇二三、一〇二九、一〇三一、一〇三七頁)。

(25) 「曺判決」四丁。

(26) 『社会運動の状況』一九四二年版、八二八頁(『集成』4、八五八頁)。

(27) 『特高月報』所収「在日朝鮮人運動日誌」(『集成』4、一〇五一頁)。

(28) 『社会運動の状況』一九四〇年版、一二六四頁（『集成』4、四九八頁）。同、一九四一年版、一〇二四頁（同前、七二二頁）。
(29) 「曺判決」六～七丁。
(30) 「梁原剛一［梁麟鉉］に対する（東亜連盟運動関係朝鮮独立運動）治安維持法違反被告事件判決」（『思想月報』第一〇一号、一九四三年三・四月）七一～七三頁。以下、「梁判決」と略記する。
(31) 曺寧柱、前掲談話では、金貞默は朝鮮に帰国して東亜連盟運動を進めた、としている。
(32) 東亜連盟協会編『東亜連盟建設要綱』第二改訂版（立命館出版部、一九四〇年）六〇頁。
(33) 以下、曺寧柱「日鮮雑考」（『王道文化』第三巻第一号、一九四〇年二月）。『王道文化』を刊行していた日蓮主義系団体精華会と東亜連盟運動の関係については第Ⅲ章で述べる。
(34) 東亜連盟協会編、前掲書、六六～六七頁。
(35) 拙稿「植民地末期朝鮮におけるある転向者の運動――姜永錫と日本国体学・東亜連盟運動――」（『人文学報』第七九号、一九九七年三月）一三二～一三八頁。以下、同論文は、拙稿bと略記する。
(36) 梁麟鉉氏の筆者宛私信（一九九七年八月二日）。
(37) 『社会運動の状況』一九四二年版、八二七頁（『集成』4、八五七頁）。
(38) 五百旗頭真「東亜聯盟論の基本的性格」（『アジア研究』第二二巻第一号、一九七五年四月）三四頁。
(39) 拙稿a、八〇～八二頁。
(40) 曺寧柱「京都に於ける内鮮協和運動の手記」（『東亜連盟』第四巻第三号、一九四二年三月）。
(41) 石原莞爾「国民社会主義ドイツ労働党初期の運動」（一）（一九四四年三月、石原莞爾全集刊行会編刊『石原莞爾全集』第七巻、一九七六年、一八六頁）。
(42) 梁麟鉉、前掲私信。
(43) 『社会運動の状況』一九四一年版、九七三頁（『集成』4、六七一頁）。
(44) 梁麟鉉、前掲私信。拙稿a、八〇～八一頁。
(45) 曺寧柱、前掲「京都に於ける内鮮協和運動の手記」五六頁。
(46) 「曺判決」四～六、八丁。「梁判決」七三～七四頁。
(47) 曺寧柱、前掲「京都に於ける内鮮協和運動の手記」五七～五八頁。
(48) 同前、五八頁。
(49) 文鶴東『산넘어 바다건너――격동기의 한 생애』（書堂、一九九二年）四四～四五頁。
(50) 『特高月報』一九四一年九月分（『集成』4、七六二頁）。
(51) 『社会運動の状況』一九四一年版、四三六～四三八頁によれば、四一年一二月現在、東亜連盟協会会員数は一一〇六四名、うち京都府の会員は九八二名で、これは山形県の一九五一名に次ぐ規模である。

(52) 韓晳曦『人生は七転八起――私の在日七〇年』（岩波書店、一九九七年）三七～三八頁。
(53) 曺寧柱、前掲談話。
(54) 『社会運動の状況』一九四二年版、八二九頁（『集成』4、八五九頁）。神棚の設置への批判については、第一六師団長時代の石原が満洲国の状況についてよく似た批判を口にするのを曺は耳にしていたから（「曺回顧」C、二一一頁）、運動の初期であれば曺から実際にそのような発言がなされたかも知れない。また、朝鮮史関係の書籍を探し求め学習したことについては、文鶴東、前掲書、四五～四六頁に触れられている。
(55) 梁麟鉉氏の筆者に対する談話、一九九七年七月一五日。福島、前掲私信。
(56) 石原莞爾「日記」一九四〇年六月一日の条（角田編、前掲書、三五二頁）。
(57) 以下、梁麟鉉、前掲私信。なお、原文は朝鮮語だが、引用中、石原の直接話法の部分（五千年歴史ある……）は日本語で書かれている。
(58) 『社会運動の状況』一九四二年版、八二七頁（『集成』4、八五七頁）。
(59) 曺寧柱、前掲談話。
(60) 石原、前掲「国民社会主義ドイツ労働党初期の運動」（一）一八六頁。
(61) 曺寧柱、前掲「京都に於ける内鮮協和運動の手記」五七頁。
(62) 「東亜連盟協会ニュース」（『東亜連盟』第二巻第七号、一九四〇年七月）一一九頁、同前（『東亜連盟』第二巻第一二号、一九四〇年一二月）一一八頁。
(63) 東亜連盟協会「報告」第六八号（一九四一年九月一九日、『浅沼稲次郎関係文書』三〇四、国会図書館憲政資料室所蔵）、『東亜連盟協会会報』一九四二年五月二五日。
(64) 梁麟鉉、前掲私信。なお、植民地朝鮮における東亜連盟運動、同運動参加者と曺との接触などについては、拙稿b、第Ⅲ章を参照されたい。
(65) 表2の検挙者以外にも、京都での運動に参加した南宮己石（前掲表1、②④参照）が朝鮮に帰国して東亜連盟運動を行い忠清南道・大田の刑務所に日本敗戦時まで収監されていたともいう（曺寧柱、前掲談話）。なお、『思想彙報』第二六号（一九四三年一〇月）一一頁には、山城国義（本名不詳）等七名が四〇年五月以降「東亜連盟論ヲ利用スル朝鮮独立運動」を行った事件に対し、大田検事局より四二年一二月予審の請求があったことが記されているが、あるいはこれが南宮らの運動である可能性もある。また京都では、やはり東亜連盟運動に関係した朝鮮人として、一九四二年一一月崔東烈が検挙され、同一二月には南呂寧、全道漢が起訴されているが（南、全の検挙日は不明）、曺らの運動との関係は不明である。
(66) 曺寧柱「日蓮主義と朝鮮民族」（『王道文化』第七巻第九号、一九四四年一〇月）一〇頁。
(67) 『社会運動の状況』一九四二年版、八二四、八三一頁（『集成』4、八五四、八六一頁）。
(68) 白土、前掲書、三二八頁。
(69) 石原莞爾「東亜連盟協会運動要領に就て」（一九四一年一〇月、前掲『石原莞爾全集』別巻、一三四～一三五頁）、同、前掲「国民社会主義ドイツ労働党初期の運動」（一）一八六頁。
(70) 『特高月報』一九四〇年七月分、四三頁。
(71) 拙稿a、七九～八〇頁。

(72) 『在日朝鮮人史研究』第六号（一九八〇年六月）所収、一二九頁。
(73) ただし、一九四二年三月という時点で検挙に踏み切った事情は定かではない。あるいは、検挙十日前に発行された『東亜連盟』第四巻第三号に、曹が、前掲「京都に於ける内鮮協和運動の手記」を発表し、運動の様子を公然とアピールしたことがきっかけになったのかもしれない。
(74) 梁麟鉉、前掲私信。
(75) 高木清寿『東亜の父　石原莞爾』（錦文書院、一九五四年）二四八頁。
(76) 石原莞爾、前掲「国民社会主義ドイツ労働党初期の運動」（一）一八六頁。
(77) 「曹判決」一〇～一一丁。
(78) 淵上千津氏の筆者に対する談話、一九九七年一一月六日。氏は故・淵上辰雄の夫人。
(79) 「新入諸氏紹介」（『王道文化』第七巻第八号、一九四四年九月、裏表紙）。
(80) 筆者宛眞山文子氏私信、一九九七年五月二〇日、一一月二五日の教示による。眞山氏は当時、東京の東亜連盟同志会の事務所で活動しておられ、歌川平次郎夫人は従姉に当たる。
(81) 曹寧柱、前掲談話。板垣との面会については「曹回顧」Dにも記されているが、民族独立運動家との接触については触れていない。
(82) 斉藤基樹「曹寧柱先生まことにありがとうございました」（『永久平和』第四〇号、一九九六年一〇月）九頁、および、筆者宛斉藤基樹氏私信、一九九六年一一月二四日。斉藤氏は、奈良で東亜連盟運動に携わった後に上京し、内原訓練所に入所し、曹の開いていた道場にも一時寄宿していた。氏によれば、『満蒙開拓指導要綱』は正確な名称ではなく、また、内容も推測とのことである。
(83) 五百旗頭真「石原莞爾における日蓮宗教」（二）（『政経論叢（広島大学）』第二〇巻第一号、一九七〇年四月）九九頁。
(84) 曹寧柱、前掲「日蓮主義と朝鮮民族」一三頁。
(85) 同前、一一頁。
(86) 「曹回顧」C、二三一頁。回顧の原文では、全国を回ったのが検挙前のことのようにも読めるが、その時期の官憲資料等にそのような記載はない。他方、曹の出獄後については、『特高月報』一九四四年八月分、三六頁が、東亜連盟同志会が各地で活発に講演会を開き「曹寧柱等も講師として出演」していることを伝えている。これらから、曹が工作員として全国を回ったとするのは出獄後の時期と判断した。
(87) 『東亜連盟同志会会報』一九四五年五月一日、一四頁。
(88) 「社説　一半島同胞の信念」（『朝日新聞』一九四五年四月二七日）。なお、この徴用工の指導が一九四四年から始まっていたとした点は、石原莞爾「新日本の建設」（一九四五年一〇月、前掲『石原莞爾全集』第二巻、所収）三五～三六頁の記述に拠った。
(89) 権逸『権逸回顧録』（同刊行委員会、一九八七年）七五～七六頁。
(90) 特高第二課「臨時議会後ニ於ケル革新陣営ノ意向」（一九四四年九月、粟屋憲太郎・吉田裕編『太平洋戦争期　内務省治安対策情報』第八巻、日本図書センター、一九九五年、一〇五頁）。
(91) 坪江、前掲書、二七七頁。

(92) 権逸、前掲書、八八頁、同『祖国への念願』(松沢書店、一九五九年)一七頁。両著書では、曺は群馬で日本敗戦を迎え、玉音放送を権逸とともに聞いたことになっている。ただし、石原莞爾平和思想研究会編『石原莞爾戦後著作集　人類後史への出発』(展転社、一九九六年)九頁の石原六埴の記述によると、敗戦直後曺寧柱は「[山形県]鶴岡に駆けつけ」、八月一五日夕刻に酒田市郊外で行われた石原の講演を筆記したとされている。いずれが正しいか明らかでない。

(93) 武田邦太郎「曺寧柱先生追悼」(『永久平和』第四〇号、一九九六年一〇月)一頁。

(94) 「マルクス主義」(上)(下)(『王道文化』第九巻第三、四号、一九四八年八、一〇月)、「日蓮教と日本国」(同前、第一〇巻第三号、一九四九年四月)、「共産党員との対論」(同前、第一〇巻第四号、一九四九年六月)、「マルクス宗を救済せよ」(上)(下)(同前、第一〇巻第七、八号、一九四九年一二月、一九五〇年二月)。

(95) 木村武雄『政界独言』(土屋書店、一九六八年)一九六頁。

(96) 以下、旧東亜連盟運動系の団体史の記述は、社会問題研究会編『右翼事典』(双葉社、一九七〇年)一一五～一一六、一三八頁、木下半治『日本右翼の研究』(現代評論社、一九七七年)一五六～一五八、一八三～一九四頁、による。

(97) 「石原将軍の思出」(一)(二)(『真世界』第三巻第七、九号、一九五二年八、一〇月)、「共産党が天下をとれば」(『王道文化』第一四巻第六号、一九五二年一一月)、「陸軍中将石原莞爾」(亜東書房編刊『十人の将軍の最後』一九五二年)、「終戦後の石原将軍」(『共通の広場』第二巻第四号、一九五三年四月)、「最近の韓国事情」(『東亜連盟(戦後版)』第一巻第六号、一九五三年一〇月)、「戦後の石原さん」(『曙』第三巻第四号、一九五四年四月号)、「戦後の石原さん」(村上一郎編『ドキュメント日本人』第四巻、学芸書林、一九六九年)、「東京裁判証人尋問の一証言録」(武田邦太郎・菅原一彪編『永久平和の使徒　石原莞爾』冬青社、一九九六年)。なお、注(94)(97)のリストからは「曺回顧」A～Eを除いた。また、本文で後述するが、曺は在日朝鮮人右派系運動にも関与し、在日本大韓民国居留民団機関紙『民主新聞』等にも執筆したが、性格の異なる文章なのでここには掲げなかった。

(98) 坪井豊吉『在日同胞の動き』(自由生活社、一九七五年)八八頁。

(99) 在日本大韓民国居留民団編『民団二十年史』(同中央本部宣伝局、一九六七年)二五、四四七頁、同編纂委員会編『民団三十年史』(在日本大韓民国居留民団、一九七七年)三三頁。以下、曺の経歴についてはこれらの書に拠った。

(100) 鄭哲『民団今昔—在日韓国人の民主化運動』(啓衆新社、一九八二年)一九頁。

(101) 前掲『民団三十年史』三五頁。なお、今一人の運動指導者の梁麟鉉は、戦後一九四五年一〇月南朝鮮に帰国、米軍政庁に勤務し、韓国陸軍に入り朝鮮戦争にも従軍した(梁麟鉉、前掲私信による)。

(102) 鄭哲、前掲書、一九頁。朴慶植『解放後在日朝鮮人運動史』(三一書房、一九八九年)四五七頁。

(103) 前掲「京都府知事引継文書」一九四〇年分(『在日朝鮮人史研究』第六号、一三一頁)。

(104) 森・大門編、前掲書、第一章、参照。

(105) 『社会運動の状況』一九四二年版、八二七頁(『集成』4、八五七頁)。

（付記）本稿準備中の一九九六年六月、曹寧柱氏の訃報に接した。心よりご冥福をお祈りします。また、本稿の作成に当り、資料の閲覧や聞き取り調査などについて、曹氏の他、特に以下の方々に大変お世話になりました。記して謝意を表します（順不同、敬称略）。康太洙、梁麟鉉、金一龍、文鶴東、福島清、眞山文子、斉藤基樹、淵上千津、河野信、平澤光人、保坂喜美、多胡吉郎。